

明治時代に巣箱とセイヨ

ウミツバチを用いた西洋式の養蜂(ようほう)が始まった岐阜県は近代養蜂業発祥の地。ミツバチが好むレンゲの作付面積は日本一、岐阜県産のレンゲ蜂蜜(はちみつ)は国産最高級ブランドだ。

「この地で養蜂業が栄えた理由は郵便番号の500番にある」。養蜂問屋で、はちみつメーカーでもある

秋田屋本店(岐阜市)の9代目店主、中村正社長は話す。鹿兒島からミツバチと共に貨物列車で移動しながらみつを採取してきた養蜂家は、郵便番号が示す通り本州の真ん中に位置する岐阜で小休止するのが常。

養蜂問屋は資機材を商うだけでなく、養蜂家に運転資金や機材一式を貸し出す

200年企業

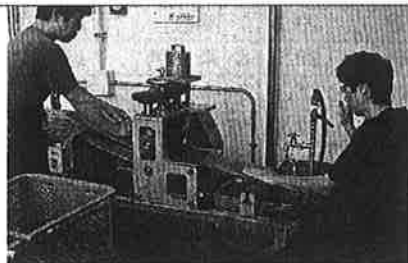
□79

—成長と持続の条件

こともあった。中村社長の祖父や父の7代目、8代目・中村源次郎氏は大勢の養蜂家を自宅に招き、接待に努めた。英気を養った養蜂家は必要な資機材を補充し、北海道に向け再び北上して行った。移動手段はトラックに変わったが秋田屋本社ビルは今もJR岐阜駅

養蜂「レンゲの利」生かす

秋田屋本店、資材も独自製作



印庄機で「巣礎」生産

ミツバチの巣は古くになると六角形の部屋が狭くなる。幼虫の成育に悪影響が出るため取り除いてシート状にし、印庄機で「巣礎」に再生する。巣礎は温度や湿度に合わせ微調整しながら毎日生産する。同社は戦前、高性能の米社製印庄機を輸入して生産性を高めた。岐阜が米軍の空襲を受けた時、7代目・中村源次郎氏は大切な印庄機を必死で守った。

生き物を扱う難しい事業を続けてこられた理由を「独立色の強い個人営業の養蜂家が相手だったのが大きい」と中村社長は話す。農業協同組合や大企業には

と定めた。5代目までは材木商一本だったが、「岐阜で最初に洋服を着た」と伝えられるほど好奇心が強く、進取の気性に富む6代目・源次郎氏は1887年にスギでミツバチの巣箱を製作したのを契機に養蜂の世界に身を投じた。養蜂先進国のイタリアから技術導入したが気候が違いため苦労した。独自の改良を加え、ミツバチの品種改良までやった。飛躍の契機はミツバチが六角形の巣を作る時の土台になる巣礎を日本で初めて製作、「いろは巣礎」と名付けて売り出したこと。巣礎があると3〜4日で巣ができるため養蜂には不可欠の資材だ。長は話す。

1915年に養蜂の最新情報を書いた「養蜂いろは新聞」を発行している。顧客を啓蒙(けいもう)しながら市場を広げていった。7代目・源次郎氏は日本が影響力を強めていった中国大陸や朝鮮半島に向けて通信販売を開始、「秋田屋商報」という通販カタログを創刊した。これは現在も続く。商才にたけた7代目

(編集委員 竹田忍)